

「医業」とは別のいとなみで

—橋田邦彦の「医行」論—

勝井 恵子

東京大学大学院教育学研究科／北里大学東洋医学総合研究所

橋田邦彦（1882–1945）は、東京帝国大学医学部教授として自身の生理学研究に専心するかたわら、道元の『正法眼蔵』研究や「全機性」という概念を軸とする独特の科学論の展開に注力した人物として知られるが、主著とされる『碧譚集』（1934年）および『空月集』（1936年）につづく『行としての科学』（1937年）の発表により、日本主義的科学論の代表的論客として見なされるようになった。そして、第一高等学校長を経て第56代文部大臣として戦時下の教育行政に深く関与し、戦後、A級戦犯に指名され服毒自決するという彼の最期は、「橋田邦彦」という研究対象を公然と取り扱うことを長きにわたり憚らせてきた。そのため、彼を主題とした研究は未だ十分な展開をみせておらず、今や「葬られた思想家」とまで称される「橋田邦彦」という人物の包括的な理解は、困難をきわめる。

しかしながら、この「葬られた思想家」は、一生理学者からいかにして思想家となりえたのだろうか。「橋田邦彦」を思想研究の対象とするさいに、彼の思想そのもののみならず、その形成過程をも議論の俎上に載せるべきであるということは、先行研究においてもいくつか指摘がなされているが、実際にそれを詳論しているものは管見のおよぶ限りでは見当たらない。

ところで、浅田宗伯門下の漢方医である藤田謙造を父にもち、「『医』といふことに就いては子供の頃から何かしら頭に浸み込んで居ります」という橋田は、著作のなかで繰り返し「医」というものへの論究を試みている。橋田の論にしたがえば、「医」とは「病」の治療という目的のもと、「医的科学」としての「医学」、「仁者の行術」としての「医術」、「人」の道としての「医道」のそれぞれが三位一体となり成立するものであり、これを体得した者こそ、「医人」と呼ばれる存在となるという。そして橋田は、「医」というものに携わる者すべてにたいし、生業としていとなまれる「医業」ではなく、「医」を行ずること、すなわち「医行」の実践を要請するのである。

そこで本発表では、橋田の「医行」論の概略を、「医業」とのちがいに言及しつつ、提示すことを目指したい。橋田によれば、「行」とは、人の「人」としてのはたらき、人の「人らしい」はたらきであり、ただ一般に私たちが日常的にみせるはたらきとは異なるものであるという。また、「行」というものには「正すこと」や「究めること」といった意味も含まれることから、「行ずる」ということは「学すること」でもあると指摘する。そして、「行」と「学」の一体化により、人が「人らしさ」を体得し、「生」をして「生」たらしめるといったことが可能になるという。

たしかに、「医」の目的である「病」の治療の実現は、生業としての「医業」のいとなみであっても容易に達せられるものだろう。しかし、自己反省として常に「医」の省察を各々に求める橋田が重視するのは、そのいとなみが常に「医」というものを正したり究めたりする境地に達しているか、換言すれば、「医」という理念を常に「学」しているか否かという点なのである。橋田にとって「医」とは、生業としての「医業」といういとなみを超え、「医」に携わる者の「人」としてのはたらき、あるいは「人生活動」そのもののいとなみとしての「医行」によってこそ実現されるものなのである。

一見すると、橋田の「医行」論への着目は、思想形成過程というよりかはむしろ、彼の思想そのものの取り扱いとして捉えられるかもしれない。しかし、橋田が繰り返し広げた「医行」論は、「科学」のなかでも「医学」という限定的な範囲を対象として熟考されたひとつの理論の完成形であり、のちに「科学」というものを「行」として捉えるといった彼の大胆かつ壮大な科学論へと接続されることをふまえれば、見逃すことのできない思想形成過程の一部といえるだろう。